

米国議会図書館所蔵『源氏物語』の本文の様相

—— 帯木巻を中心に ——

菅 原 郁 子

一 はじめに―素性と伝来―

本稿では、米国議会図書館 (Library of Congress) 所蔵『源氏物語』(以下、「米国議会図書館本」とする) の帯木巻を中心に考察する。

米国議会図書館本⁽¹⁾ (LC control No.2008427768) は、米国議会図書館アジア部日本課 (Library of Congress, Japanese Rare Book Collection) に二〇〇八年より所蔵となった『源氏物語』の写本である。全五十四帖揃、縦二五〇・二五・二糎、横十六・八〇・十七糎、列帖装(綴葉装)、料紙は鳥の子、題簽は柿渋色、表紙は濃青色、後補改装かと思われ、前蓋に「源氏 全部五十五冊／五辻殿諸仲御筆／外題三条西殿実隆御筆」と金字された黒塗箱に収められ、

古筆了仲(一六五六―一七三六)の折紙が添えられている。了仲の折紙の記載によれば、本文は五辻諸仲(一四八七―一五四〇)、外題は三条西実隆(一四五五―一五三七)の手によるものである。ゆえに、書写年代は米国議会図書館蔵書目録において、実隆没年の一五三七年以前とされている⁽²⁾。

米国議会図書館本については、すでに先行研究をふまえ、米国議会図書館本の素性や伝来について考察し、桐壺・空蝉・若紫巻の実態について検証している⁽⁴⁾。そこで本稿では、さらに帯木巻辻の本文の様相を探っていくこととする。

米国議会図書館本の素性と伝来について概略を述べておく。米国議会図書館本に添えられた古筆了仲の折紙には、「源氏物語四半本 全／五辻殿諸仲卿真筆／外題三条西殿

実隆公／御一筆無疑者也／五月下旬（正徳元年）了仲（古筆）釣玄斎（陽刻朱印）」とある。つまり了仲は、この『源氏物語』は五辻諸仲の真筆であり、外題は三条西実隆によるものに相違ない旨を正徳元年（一七一）五月下旬に記している。了仲は天保七年（一八三六）版『古筆了伴大人関和漢書画古筆鑑定家系譜並印章』によれば古筆別家の三代目であり、「釣玄斎」という印章を折紙に用いていた。

了仲の折紙に登場する米国国会図書館本の書写者とされる五辻諸仲は天文七年（一五三八）十二月二七日に従三位に叙せられて堂上家に加わっている。明応九年（一五〇〇）の拝賀の記録を記した『諸仲藏人奏慶記』⁷などがあり、また『日本書流全史』⁸によれば、実隆を祖とする三条流（逍遙院流）に諸仲の名が見える。『実隆公記』⁹永正五年（一五〇八）九月七日条には、諸仲が五枚の三十六歌仙の画の色紙に歌を書いてほしいと所望し、色紙を預け置いた、という記述も見えることから、諸仲は和歌や書を通して、米国国会図書館本の折紙に見える三条西家と関わりのある人物であることが確認できる。

拙稿¹⁰でも指摘したが、諸仲が書写したとされる『源氏物語』について、渡部榮氏の著書である『源氏物語従一位麗子本之研究』¹¹に興味深い記述が見える。渡部榮氏（一九一三～一九九一）は国文学者、古文書学者であり、北小路健と

いう名で執筆活動も行っていた人物である。東京文理科大学国文科を卒業、玉井幸助氏、山岸徳平氏らに師事し、後に本文研究の末、京極北政所（従一位麗子）の書写した「従一位麗子本（渡部氏は著書の中で「じゅいちいよしこほん」とルビを付す）」の系統を伝える本文、いわゆる転写本を所持していた人物である。

渡部氏の『源氏物語』の本文研究の主軸となった従一位麗子本¹²とは、平安時代末期に源麗子が書写したとされる『源氏物語』の古写本のことである。源麗子は村上天皇の子具平親王の孫で、源師房と藤原道長の五女尊子との娘であり、藤原師実の妻となった人物である。従一位麗子本は、「麗子本」や「京極北政所本」とも呼ばれ、その存在は、『河海抄』に内容についての言及があり、鎌倉末期に河内守であった源光行・親行の親子によって作成された河内本の基となった本文の一つであるとされているものである。この転写本と見られる写本が昭和初期になって出現したものと考えられる。

興味深いのは渡部氏が指摘するこの麗子本を調査するにあたり、渡部氏は麗子本に対校した本文について、

此所までの部分に就いては殆ど必要は無かつたのであるが、此の後の部分の論述に対して、かなり重要な資

料を提供する一本を紹介し、以下考察の便宜上本文を併記する事とする。此の本は縦八寸四分、横五寸六分、青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。一丁平均十行書きの部分⁽¹⁴⁾が最も多く、十一行の部分も多少存する。知人の仲介を得て借覧し校合研究の機をあたへられたものであつて、現在東京市居住の某氏の珍藏される所である。奥書が存しないので、確実には誰の手に依つて書写され、如何なる系統の親本に依つて転写されたものかは明かにしがたいが、次の如き古筆の極め札が附されてゐる。

源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆

公御

筆無疑者也

正徳元年

古筆

五月下旬

了仲

印

と記していることである。つまり、麗子本と対校した本文には「源氏物語四半本全五辻殿諸仲卿真筆外題三條西殿実隆公御筆無疑者也」という極札の付いた五辻諸仲卿の真筆本（以下、「諸仲本」とする）を用いたというのである。これは先ほど述べた米国議会図書館本の古筆了仲の折紙の

記述と全て一致するのである。渡部氏は諸仲本には折紙ではなく、「極め札」が附されていたとするが、極札にしては長文の記述形式であり、極札とは考えにくい。「正徳元年」五月下旬をあえて二行に分けて記述しており、これは折紙の記述形式を活かして翻刻したものであるう。つまり、渡部氏が見た諸仲本に添えられていた「極め札（折紙）」と、米国議会図書館本の折紙とは同一のものと考えられるのである。さらに諸仲本について、渡部氏の指摘する「縦八寸四分、横五寸六分」青色の表紙に正中に朱色の題簽を押し、鳥子紙の粘葉装で、五十四冊一筆本である。」は、「粘葉装」という記述以外は米国議会図書館本の書誌形態とほぼ一致している。

この諸仲本の極札の記述が米国議会図書館本の折紙の記述と一致し、諸仲本桐壺巻と米国議会図書館本桐壺巻の本文を実際比較してみたところ、二つ以外の諸写本にはなく、二つの本文にしか見られない独自の共通異文（約三〇例）が散見された。⁽¹⁵⁾つまり、米国議会図書館本は、昭和初期、渡部氏が見て以来行方不明であつた諸仲真筆本そのものであると考えられるのである。

拙稿では、すでに米国議会図書館本の実態をさらに調査すべく、桐壺・空蟬・若紫巻の本文について検証している。⁽¹⁶⁾よって本稿では、これらの私見をふまえつつ、さらに

帚木卷の本文の様相を探っていくこととする。

二 米国議会図書館本帚木卷の本文

ではまず最初に、米国議会図書館本（以下、校異比較においては【LC】と略称する）帚木卷の本文の実態について検証する。対校した本文は以下の通りである。

大島本（大）／明融本（明）／池田本（池）／肖柏本（肖）／国冬本（国）／阿里莫本（阿）／善本叢書本（善）／前田本（前）／歴博本（歴）／日大三条西家本（三）／伏見天皇本（伏）／穂久邇文庫本（穂）／保坂本（保）／飯島本（飯）／静嘉堂文庫本（静）／高松宮本（高）／尾州家本（尾）／御物本（御）／陽明文庫本（陽）／天理河内本（天）／東洋大本（東）

これらの『源氏物語』の古写本二本と対校したところ、おおよそ、大島本（大）、明融本（明）、池田本（池）などに近い本文であると考えられる。

いくつか具体例を見ていきたい。

① 【LC】なかめるまゝ、にはふかす（5才8）¹⁸（大）（明）

（池）（三）（伏）（飯）（静）

【高】 なかめるまゝ、によのそしりをもこと¹⁹にいたはらず（尾）（天）

【陽】 なかへかめるまゝ、に世のそしりおもことには、からず

② 【LC】 されはみたるも（11才9）（大）（明）（池）

（肖）（三）（伏）（飯）（静）

【高】 されはみたりなにくれのこはこやうのものはさまをかへつ、しいてたるも（尾）（天）

【陽】 されはみたるなにくれのこはこなとやうの物はさまをかへつ、しいてたるも

③ 【LC】 むくつけき事とつまはしきをしていはんか

たなしと（24ウ3）（大）（明）（池）（肖）（三）（伏）（飯）（静）

【高】 むくつけき事とつまはしきをしてかのにほひはかけて又まねひなせそいはむかたなしと（尾）（天）

【陽】 むくつけしとつけはしきをしてかのにほひはかけてまたまねひなせそいはんかたなしと／「け」に「ま」とナヅリ

④ 【LC】 おはしまして御物かたり（26ウ5）（大）

（明）（池）（肖）（三）（伏）（静）（高）（尾）（天）

【陽】おはします御なをしはかりはかなくひき、給て御物かたり（飯）

【国】おはします御なをしはかりはかなくひき、給て御物かたりしし

長文の部分で校異を見ると、例えば、①【LC】の「なかめるま、にはふかす」は（大）（明）（池）（三）（伏）（飯）（静）などと同じで、【高】の「なかめるま、によのそしりをもことにいたはらす」という河内本系統の本文や、【陽】の「なかへかめるま、に世のそしりおもことには、からす」とは異なっていることがわかる。

②③【LC】の例なども同様で②「されはみたるも」③「むくつけき事とつまはしきをしていはんかたなし」とは、（大）（明）（池）（三）（伏）（飯）（静）と一致し、同じ箇所【高】「されはみたりなにくれのこはこやうのものはさまをかへつ、しいてたるも」「むくつけき事とつまはしきをしてかのにほひはかけて又まねひなせそいはむかたなしと」や、【陽】「されはみたるなにくれのこはこなとやうの物はさまをかへつ、しいてたるも」「むくつけしとつけはしきをしてかのにほひはかけてまたまねひなせそいはんかたなしと」の長い表現とは一致しない。

④【LC】「おはしまして御物かたり」は（大）（明）（池）

（肖）（三）（伏）（静）の他、河内本系統の（高）（尾）（天）とも同じ本文表記の傾向が窺える箇所であるが、【陽】「おはします御なをしはかりはかなくひき、給て御物かたり」【国】「おはします御なをしはかりはかなくひき、給て御物かたりしし」などの表現とは異なっていることがはっきりと見て取れる。

つまり、帚木巻の大部分においては、大島本（大）、明融本（明）、池田本（池）などのいわゆる青表紙本系統に近い本文であると考えられる。

三 他写本との部分近似

次に、米国議会図書館本には大島本や池田本などと共通しない異文箇所も散見されるため、その部分と他写本との部分的な近似性について比較検討する。以下に具体的に見ていくこととする。

⑤【LC】是は二のまぢの心やすきなるへし（2ウ8）

（池）（肖）（陽）（国）（穂）

【大】二のまぢの心やすきなるへし（明）（伏）（静）

（高）（尾）（天）

⑥【LC】かたをはつくるひ（3ウ7）（静）

【大】かたをはいひかくしさてありぬへきかたをは
つくろひて（明）（池）（三）（飯）

⑦ 【LC】みしかくて人けなきあたり（4ウ3）（高）
（尾）（阿）（御）

⑧ 【大】みしかくて人けなき（明）（池）（肖）（三）（伏）
【LC】藤式部のそう（4ウ6）（静）（高）（尾）

【大】藤式部のせう

⑨ 【LC】本上（4ウ9）（高）（尾）（天）（阿）

【大】もとは（池）（肖）（三）（静）（伏）（陽）

⑩ 【LC】三四位ともの（5オ6）（高）（尾）（天）（阿）

【大】四位ともの（明）（池）（肖）（静）（日）（伏）
（陽）（国）

⑪ 【LC】君は御心のうちに（6オ1）（高）（尾）（天）
（阿）（国）

【大】君は↓右以外全て

⑫ 【LC】みえ給ふ此ついでに（6オ4）

【高】みえたまへりこのついでに（尾）（天）（阿）（国）

【大】みえ給ふ↓右以外全て

⑬ 【LC】侍し程に（17オ3）（静）

【大】侍しほとはこよなく心とまり侍き（明）（肖）

（伏）（飯）

【陽】侍し程はいとこよなく心とまり侍しを

【御】侍しほとはいとこよなく心とまり侍き（国）
（池）（高）（天）

⑭ 【LC】えせ物かたり也（24ウ4）（高）（尾）（天）
（国）（陽）

【大】該当本文なし↓右以外全て

⑮ 【LC】五月五日の（25ウ1）（高）（尾）（天）（国）
（阿）

【御】五月の／月＋五日

【大】五月の↓右以外全て

⑯ 【LC】九月九日の（25ウ2）（高）（尾）（天）（国）
（阿）（御）

【大】九日の↓右以外全て

⑰ 【LC】よろこひかしこまるこきみには（38ウ7）
（高）（尾）（天）（阿）（御）

【陽】よろこひかしこまるこ君は

【静】おとろきかしこまるこ君は

【大】かしこまりよろこふこきみには

⑱ 【LC】該当本文なし（39オ5）（静）

【大】かたはらいたしなやましければ↓右以外全て

大島本以外の他写本との近似表現で一番多いのは、⑦、
⑫、⑭、⑰のように、（高）（尾）（天）などの河内本系統

の本文である。また、⑤⑪⑭⑯などのように、陽明本や国冬本と近似している表現もあり、⑨⑫、⑮⑰などのように、阿里莫本とも共通する表現が多数散見される。このような近似性は、これまで比較検討してきた桐壺・空蟬・若紫巻と同様の見解である。

さらに帚木巻独自の近似性として興味深いのは、静嘉堂文庫本との近似である。わずかではあるものの、⑥⑬⑱のように、⑥の大島本では「かたはいひかくしさてありぬへきかたをはつくりひて」が【LC】では「かたをはつくるひ」とあり、⑬【LC】の「侍し程に」は（大）では「侍しとはこよなく心とまり侍き」とあり、⑱【LC】の「該当本文なし」は（大）では「かたはらいしたしなやましければ」とある。すなわち、⑥⑬⑱の【LC】はいずれも静嘉堂文庫本とのみ一致する表現となっていることがわかるのである。静嘉堂文庫本の帚木巻は伝冷泉為秀筆とされる写本で帚木・空蟬二巻の零本ではあるものの、今後も別途検証の必要があると考えられる特徴が窺える。

四 米国議会図書館本帚木巻の独自性

最後に、米国議会図書館本帚木巻の独自性について言及する。

米国議会図書館本の帚木巻には、空蟬・若紫巻同様に欠落している本文部分がある。

〈頭中將の弁―女の三階級について、左馬頭の弁―中流の女の面白さの場面〉

にぎははしきによるべきななり」とて、笑ひたまふを、「別人の言はむやうに心得ず仰せらる」と中將憎む。

「もとの品、時世のおぼえうち合ひ、やむごとなきあたりの、内々のもてなしけはひ後れたらむはさらにも言はず、何をしてかく生ひ出でけむと言ふかひなくおぼゆべし。うち合ひてすぐれたらむもことわり、これこそはさるべきこととおぼえて、めづらかなることと心も驚くまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。

さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられた

（『源氏物語』 帚木巻六〇頁）

雨夜の品定めの一場面である。頭中將が女性の階級の実質的な内容として、家柄・世評・経済力を挙げるが、結局財力が豊かであることにつきると光源氏に揶揄されてしまう。それを受けて左馬頭が高貴な女性には縁がないが、中

流階級の女性で、誰からも知られず、鄙びたところに住んでいる女性が思いのほか美しかったりするという状況に心惹かれるものだという内容であるが、この部分が米国議会図書館本では欠落している。

これを踏まえつつ、空蟬・若紫巻同様、この欠落した本文以外の部分を、『源氏物語』古写本の二一本の本文と対校すると、帚木巻は独自異文と思われる用例が一五〇例程度あることがわかる。

帚木巻における独自異文の可能性があると思われる用例のうち、前後の文字が逆さまになっている例、一文字程度で異なる例なども多いが、これは書写する段階における誤字脱字や目移りなどの可能性が高い。

そこで、具体例は、三文字以上で表記が異なる例を挙げてみることにする。

- ⑲【LC】すこし見はやまてにこそなん（3才4）
【大】すこしみはやさてなん
⑳【LC】いとなみなとして（5才4）
【大】いとなみて
㉑【LC】さま／＼のかんたちめよりも（5才6）
【大】なま／＼の上達部よりも
㉒【LC】見すへくもおほえず（9才4）

- 【大】かへり見すへくもおもへらす
㉓【LC】該当本文なし（10才2）
【大】うらむへからむふしをも
㉔【LC】おほせしらすかほかにもてなしはいまほしからん事をも（11才7）
【大】おほせ
㉕【LC】うらみにそむきぬへき（14才9）
【大】かたみにそむきぬへき
㉖【LC】いまめきたる物のをとなればきよく（18才1）
【大】いまめきたるもの、こゑなればきよく
㉗【LC】はかなき身もこそ（21才4）
【大】はかなきよにそ
㉘【LC】ところの水のをととのたまふ（27才5）
【大】所をとの給
㉙【LC】該当箇所なし（28才6）
【大】うちさ、めきいふこと、もをき、給へはわか御うへなるへし
㉚【LC】みことのりはしんかしと（29才4）
【大】みおとりはしんかしと
㉛【LC】該当箇所なし（29才8）
【大】にけなきおやをまうけたりけるかなうへに

も

③② 【LC】右衛門督の子は（36オ3）

【大】中納言のこは

③③ 【LC】たちのほれりけるとなへてかやうのほと

らざりけるを（40オ6）

【大】たちのほれりけると

①⑨ 【LC】の「すこし見はやまてにこそなん」は、大島本の「すこしみはやさてなん」のように、「そうしたら」よりもさらに「そこまですたなら」とより強調した表現になっているといえる。続く②⑩ 【LC】の「いとみななとして」も、大島本は「いとみなみて」となっているが、「な」と追加されている。同じように副詞的・助詞的な要素として強調されているのが、②⑪ 【LC】の「さま／＼のかんたちめよりも」である。大島本では「なま／＼の上達部よりも」となっている箇所であり、「生半可な上達部」という意だが、【LC】では上達部の様々の身分を暗示する表現となっている。これは先ほど述べた②⑩ 【LC】の「四位」を「三四位」と階級を限定せず臚げに表現する描写とも連動しているように思われる。

また、省略傾向にある表現も見られる。②⑫ 【LC】の「見すへくもおほえす」は、大島本のように「かへり見すへく

もおもへらす」と、「かへり見す」の原義である立ち戻るという意味の表現効果が見受けられない。②⑬ 【LC】のよ
うに、該当箇所のない部分においても、大島本では「うら
むへからむふしをも」となっているが、その箇所が【LC】
では欠落または省略されている。その逆で②⑭ 【LC】の「お
ほせしらすかほかにもてなしはまほしからん事をも」は、
知らないふりをして取り計らい、言いたくない事も、と男
性の心情がより詳細に表現されている部分も見受けられ
る。

②⑮ 【LC】の「うらみ」と大島本の「かたみ」の部分は
「うら」と「かた」の字母の連綿が近似していることから
の誤写の可能性も否めないが、『源氏物語』本文の前後に
は「憎げ」「ねたげ」などの表現があることから、「うらみ」
という表現があったとしても文意の不自然さは見られな
い。

②⑯ 【LC】では「いまめきたる物のを」と（音）」として
いるが大島本では「こゑ（声）」である。これは、左馬頭
の浮気な女の体験談における場面で、この表現の直後の和
歌「琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやと
めける」（帚木卷七九頁）に寄り添えば、「琴の音」という
ことになり、現代風の音と捉えれば、「を」とでも不自然
ではないと思われる。むしろ「こゑ」より妥当といえるか

もしれない。

②7 【LC】では「はかなき身」としているが、大島本では「はかなきよ（世）」としている。頭中将の体験談として内気な女（夕顔）のことを語る場面であるが、「身」とした方が、ここでは夕顔の身のはかなさや弱さがより一層強調される表現になると考えられる。

②8 【LC】では「ところの」の後に「水のをとなど」と追加されている。光源氏が紀伊守邸へ方違えにいく場面であるが、紀伊守邸のある中川周辺の涼しい風景描写がより一層強調される表現となっている。

②9 【LC】の該当なしの部分は、大島本では「うちさ、めきいふことゝもをきゝ給へはわか御うへなるへし」と一続きの切りの良い一文であるから、一行ごと書き落とした可能性も考えられる。同じように③1 【LC】の「にけなきおやをもまうけたりけるかなうへにも」も該当箇所がなく、空蟬が夫の子供達と同年代であることの説明であり、重要ではあるもののやはり書き落とした可能性が考えられる。

③0 【LC】の「みことのり（詔）」の箇所は、光源氏が紀伊守邸において、女房たちの噂話を耳にし、その様子が中流的であると軽蔑し、この女房たちの女主人（空蟬）も期待外れかもしれないと思う場面である。やはり文意としては「みおとり（見劣り）」であり、「詔」は不自然である

といえる。

③3 【LC】の「たちのほれりけるとなへてかやうのほとならさりけるを」は、大島本では「たちのほれりけると」のみである部分である。女（空蟬）の気強さを表現する場面であるが、「なへてかやうのほとならさりけるを」としており、前後関係を見ると、「すべてこのような程度ではないのを」となり、女の気強さをいうには矛盾があり、一貫性のない表現となってしまう。

③2 【LC】の「右衛門督の子」は小君（空蟬の弟）をさすが、小君の父は「右衛門督」と「中納言」を兼ねていたのであり、二つの役職についていた経験があることから、どちらの表現であっても不自然ではないと考えられる。

結果として、米国議会図書館本帯木巻の独自異文と思われる部分は、三文字以上の表記の異なる箇所を比較検討すると、単に誤写や目移りということだけでは片付けられないのである。『源氏物語』の本文内容に対する教養のある書写者が、緻密に書き写したと考えられ、また一方でそうした本文部分を持つ写本があったのではないかと期待させる表現が多いことがわかる。

五 おわりに

以上、米国議会図書館本の書誌、桐壺・空蟬・若紫巻の本文比較を踏まえたうえで、帚木巻の本文を比較検討した。米国議会図書館本は、昭和初期、渡部榮氏が見て以来行方不明であった五辻諸仲真筆本であり、従一位麗子本との関係性もあると期待される重要な一伝本である。

本稿で検討した帚木巻の本文は、大島本に近い本文であり、いわゆる青表紙本系統の本文であると考えられる。さらに大島本とは異なる異文表記部分は、河内本系統の本文や、陽明文庫本・阿里莫本などと共通する特徴的な表記も見られた。これは今まで比較検討を行ってきた米国議会図書館本桐壺・空蟬・若紫巻の本文とも共通した表現傾向であり、本文の書写経路を探る上でも重要な結果であるといえる。また、帚木巻の独自の特徴としては、伝冷泉為秀筆の静嘉堂文庫本との共通異文があり、今後も深く検証していきたい課題である。

まだ四巻ではあるものの、米国議会図書館本の本文は、やはりいわゆる青表紙本系統を基底として、河内本系統の本文、陽明文庫本・阿里莫本などの本文とも校合したのではないかと思われる箇所も散見されることから、そうした流れを汲む写本の一伝本ではないかという方向性が考えら

れるのである。

注

- (1) 国立国語研究所共同研究プロジェクト「仮名写本による文字表記の史的探究」(代表者…斎藤達哉氏)、人間文化研究機構の人間文化研究連携共同推進事業…平成二十二年「海外に移出した仮名写本の緊急調査」・平成二十三年「海外に移出した仮名写本の緊急調査(第二期)」(代表者…高田智和氏)。米国議会図書館における原本の予備調査(二〇一〇年)、詳細調査(二〇一一年・二〇一二年)のうち、二〇一〇年、二〇一一年の調査メンバーの一人として同行させて戴いた。二〇一二年二月には全巻の翻刻作業が終了し、左記の国立国語研究所HPからテキストが公開されている(国立国語研究所「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」<http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/>)。また、原本画像は桐壺・須磨・柏木巻の三巻を米国議会図書館アジア部が公開している。

(<http://lcweb4.loc.gov/service/asian/asian0001/2012/2012html/201220084277680001oc.html>)。

- (2) 斎藤達哉氏・高田智和氏編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺・藤裏葉―』(国立国語研究所、二〇一

年三月)。伊藤鉄也氏「米国議会図書館アジア部日本課蔵『源氏物語』の調査概要」(斎藤達哉氏・高田智和氏編『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻―桐壺―藤裏葉―』(国立国語研究所、二〇一一年三月)。高田智和氏・斎藤達哉氏「米国議会図書館蔵『源氏物語』について―書誌と表記の特徴―」(『国立国語研究所論集』第六号、二〇一三年十一月)。

- (3) 米国議会図書館本の先行研究については、豊島秀範氏「アメリカ議会図書館本の和歌表記の特徴―和歌の一行散らし書きを中心に―」(『國學院大學大学院平安文学研究』第二号、二〇一〇年九月)、神田久義氏「米国議会図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」(豊島秀範氏編『源氏物語本文の研究』國學院大學文学部日本文学科、二〇一一年)、斎藤達哉氏「語の表記における仮名字体の「偏り」と「揺れ」―米国議会図書館蔵源氏物語写本の「ケハヒ」と「カタハライタシ」の表記」(小山利彦氏編著『王朝文学を彩る軌跡』武蔵野書院、二〇一四年)などがある。

- (4) 桐壺巻に関しては拙稿「米国議会図書館蔵『源氏物語』の本文―麗子本対校五辻諸仲筆本の出現―」(拙著『源氏物語の伝来と享受の研究』武蔵野書院、二〇一六年所収)、若紫巻に関しては拙稿「米国議会図書館所蔵『源

氏物語』の本文の様相―若紫巻を中心に―」(『國學院雑誌』第一一九卷第七号、二〇一八年七月)、空蟬巻に関しては拙稿「米国議会図書館所蔵『源氏物語』の本文の様相―空蟬巻を中心に―」(『文教大学国文』第五〇号、二〇二二年三月)で論じている。

- (5) 森繁夫氏『古筆鑑定と極印』(臨川書店、一九八五年復刻版)所収「古筆了伴大人閔和漢書画古筆鑑定家系譜並印章」に拠る。

- (6) 五辻諸仲に関しては『尊卑分脉』第三編(『新訂増補国史大系』第六〇巻上、吉川弘文館、二〇〇一年、四〇三頁)、『公卿補任』第三篇(『新訂増補国史大系』五五巻、吉川弘文館、二〇〇一年新装版、三九八頁)、『増補諸家知譜』(『顕位明名録』上・巻第二・五一(日本古典全集刊行会、一九三八年、八六頁)、『諸家伝』十・五辻(日本古典全集刊行会、一九三九年、八〇〇頁)等を参照している。

- (7) 『諸仲藏人奏慶記』(『続群書類従』第十一輯下・公事部装束部、巻第三〇一・公事部、続群書類従完成会、一九五七年、七〇五―七一〇頁)。

- (8) 〈逍遙院流〉の項目「諸仲 五辻殿」(小松茂美氏蔵『明翰鈔』巻二十九・所収「流儀集」)〈逍遙院流〉の項目「緒(諸)仲 五辻」(静嘉堂文庫蔵『古筆流儀分』一冊)〔小

松茂美著作集第十六卷 日本書流全史二 旺文社、

一九九九年、三七五・四〇七頁。

- (9) 『実隆公記』 卷五上 (続群書類従完成会、一九六三年、九三頁)。

- (10) 拙稿「米國議會図書館蔵『源氏物語』の本文―麗子本対校五辻諸仲筆本の出現―」(拙著『源氏物語の伝来と享受の研究』武蔵野書院、二〇一六年所収)。

- (11) 渡部榮氏『源氏物語従一位麗子本之研究』(大道社、一九三六年)。復刻版として、日向一雅氏監修解題『源氏物語研究叢書 第六卷 源氏物語従一位麗子本之研究』(クレス出版、一九九七年)がある。

- (12) 北小路健(渡部榮)氏『古文書の面白さ』(新潮社、一九八四年、一三三―二四頁、三〇―三一頁)を参照。著書『古文書の面白さ』によれば、渡部榮氏は福島県生まれ、東京文理科大学国文科を卒業、教壇生活等を経て、玉井幸助氏、能登朝次氏、山岸徳平氏らに師事し、『源氏物語』の研究を行う。主な著作として、『源氏物語従一位麗子本之研究』の他、『源氏物語律調論』(文学社、一九四〇年)、『遊女 その歴史と哀歓』(人物往来社、一九六四年)、『本曾路 文献の旅』(芸艸堂、一九七〇年)等がある。

- (13) 池田利夫氏「源氏物語の古写本」(別冊國文學『源氏物語事典』特装版、学燈社、一九九三年六月、三六〇)

三六六頁)。

- (14) 注(11)に同じ。なお、「折紙」と「極め札」の混同、「綴葉装」と「粘葉装」の混同の要因については、注(10)の拙著で詳しく述べている。

- (15) 注(10)に同じ。

- (16) 注(4)に同じ。

- (17) 帚木巻において、比較対象とした写本二二本の出典は以下の通りである。

- ・(大) 大島本 『大島本 源氏物語』第一卷(角川書店、一九九六年)

- ・(池) 池田本 天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語』(請求記号・九一三・三六／イ九五) 紙焼写真

- ・(肖) 肖柏本、(国) 国冬本、(阿) 阿里莫本、(善) 善本叢書本、(前) 前田本、(歴) 歷博本 『源氏物語別本集成』第一卷(桜楓社、一九八九年)、『源氏物語別本集成統』第一卷(おうふう、二〇〇五年)

- ・(三) 日大三条西家本 『日本大学蔵 源氏物語』第一卷(八木書店、一九九四年)

- ・(明) 明融本 『源氏物語 明融本』第一卷(東海大学出版会、一九九〇年)

- ・(伏) 伏見天皇本 『伏見天皇本影印 源氏物語』第一冊(古典文庫、一九九一年)

・(穂) 穂久邇文庫本 『日本古典文学影印叢刊三 源氏物語』 第一卷 (貴重本刊行会、一九七九年)

・(保) 保坂本 『保坂本 源氏物語』 第一卷 (おうふう、一九九五年)

・(飯) 飯島本 『飯島本 源氏物語』 第一卷 (笠間書院、二〇〇八年)

・(静) 静嘉堂文庫本 『源氏物語』 伝冷泉為秀筆帚木空蟬卷 (『源氏物語大成』 『校異源氏物語』 による)

・(高) 高松宮本 『高松宮御藏河内本 源氏物語』 第一卷 (臨川書店、一九七三年)

・(尾) 尾州家本 『尾州家河内本 源氏物語』 第一卷 (八木書店、二〇一〇年)

・(御) 御物本 『御物 各筆源氏』 第一冊 (貴重本刊行会、一九八六年)

・(陽) 陽明文庫本 『陽明叢書国書篇 源氏物語』 第一卷 (思文閣出版、一九七九年)

・(天) 天理河内本 『源氏物語別本集成続』 第二卷 (おうふう、二〇〇五年)

・(東) 東洋大本 『阿仏尼本は、き木』 (勉誠出版、二〇〇八年)

(18) (5才8) とは米国議会図書館本の〈五丁オモテの八行目〉という意味である。以下、同じ。なお、該当本文のない

場合は、その前後の本文部分がある丁数・表裏・行数を提示した。

(19) 新編日本古典文学全集『源氏物語』一(小学館、一九九四年)、以下『源氏物語』の本文の活字引用はすべて同じ。

(すがわら　いくこ・実践女子大学非常勤講師

・文教大学専任講師)